

◆ビオトープ・イタンキのホタル

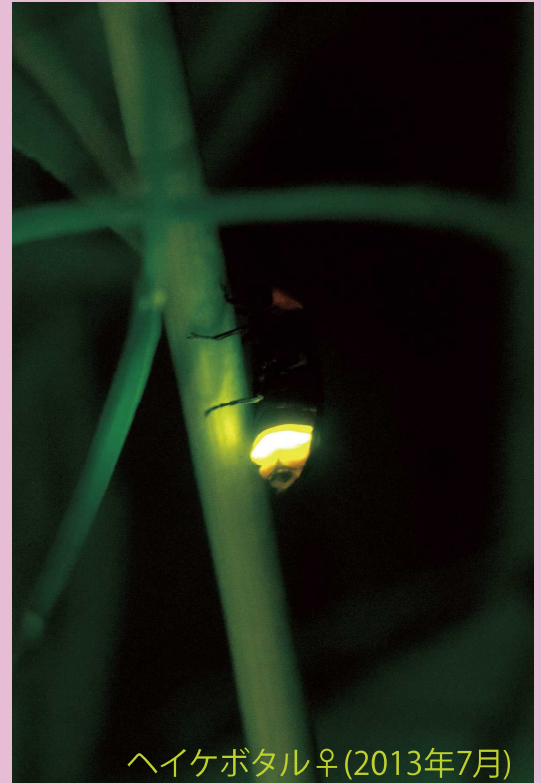
昨年 2013 年はビオトープ・イタンキでのホタルの発生が大変少ない年でした。7 月 20 日～31 日の市民観察会の期間中の天候も悪天の日が多く、参加者もまた少ない年となりました。

例年の発生は7月の初旬から始まり、徐々に数を増やして20日から月末にかけてピークを迎え、8月に入ると急速に減ってその年の発生を終えるというパターンです。昨年は発生之初めから少なく、ずっと数分の一のレベルのままピークを迎えることもなく終わってしまいました。

発生数の少ない原因については、早い段階からいろいろな可能性について検討しました。まずビオトープ・イタンキが新しく作られた環境であり、放流された幼虫は近郊・虎杖浜地区の野生を5～6年ほど累代飼育したものです。1280匹からのスタートは十分数が多いように見えますが、10匹ほどの♀親の産卵に相当し、3～5世代の累代を考えると、かなり「血が濃かった」可能性があります。この地の開発以前の生息環境を想起すると海岸に沿って湿地が連なり、♂の飛翔を介して遺伝子の交流は活発だったと想像されます。異血の導入についてはキウシト湿原の協力を得ることができました。観察会の終わった8月初旬、残りボタルから採卵・飼育し2令3令計637匹をB区C区に放流しました。

次に、これは遅くなってから気付いたことなのですが、子ども達の体験学習の獲物の中にガムシがいなかったことです。そして前年晩秋、別種かと思うほど小さなガムシをB区で捕まえたことも思い出しました。そうです、ガムシはホタルと同じモノアラガイが幼虫期の餌なのです。造成工事が終わるとモノアラガイはいつも順調に繁殖していたので、すっかり安心していました。改めて探してみると、ゼロではありませんが本当に数が少ないのです。モノアラガイの再放流には土岐さんが尽力してくれました。チマイベツ川流域の水温調節池から採集・放流してくれました。春の水温上昇にあわせてどれくらい殖えてくれるのかを注目していきたいと思います。

同時に2012年夏からどうしてモノアラガイが減ったのか？この原因の究明も大切です。ガムシの捕食圧との関係の有無は、観察で見えてくるとと思います。「これで一件落着」となるのかどうか、2014年以降の経過を見守りたいと思います。(大西 勲)



ヘイケボタル♀(2013年7月)